

実践報告

多様な高齢者と介護保険制度の理解を促す 高齢者看護学実習 — オンライン学内実習を取り入れた経験からの将来展望 —

高柳千賀子*・宮野公恵*

要旨： 本学2年次前期に行われる高齢者看護学実習Ⅰは、2020年度、COVID-19感染拡大に伴いオンライン学内実習とした。2018年度、2019年度の実習展開を基盤に、実習目標やスケジュールは極力変更せず、学生が役割を自覚し主体的に参加する仕掛けや、実習施設側の意見や協力を活かした内容とする事を基本方針として、従来の学びを経験できるよう工夫した。

その結果、1) 各実習施設とのつながりを活かし臨地実習指導者と教員の連携ができた、2) 学生が主体となるホスト役割の設定によりグループワークの活性化ができた、3) VTR事例の援助計画やレクリエーション企画等の課題と講話の知見を統合することで実習目的の達成につながっていくことが期待できる、4) 従来と同じ実習期間内でより多くの実習施設の講話を得て学びが深まった、等の成果が得られた。今後の方向性として、従来の臨地実習とオンライン学内実習の利点を組み合わせた新たな実習方法が示唆された。

キーワード： 高齢者看護学実習、介護保険制度、オンライン学内実習

A Practical Report on Nursing Practice for the Elderly to Promote Understanding of the Various Insurance Systems for Elderly and Long-Term Care: A Future Perspective from the Experience of Using Online On-campus Practice

Chikako TAKAYANAGI* and Kimie MIYANO*

Abstract: Elderly Nursing Practicum I, which will be held in the first half of the second year of our university, was conducted online in 2020 due to the spread of COVID-19 infection. Based on the training development in 2018 and 2019, the training goals and schedule should be changed as little as possible, and the content should be such that students become aware of their roles and participate voluntarily. Taking into account the opinions and cooperation of the training faculty and considering the basic policy, we devised an experience similar to conventional learning.

Consequently, 1) we could collaborate with on-site training instructors and teachers by utilizing the connections with each training faculty, 2) we could activate group work by setting host roles led by students, 3) VTR cases assistance and recreation planning were achieved by integrating the knowledge of the lectures with the issues, such as the purpose of the training, 4) the learning was deepened by providing more lectures by the training faculty within the same training period as before. The results such as were obtained. As a future direction, a new training method that combines the advantages of conventional clinical training and online on-campus training is suggested.

Keywords: Nursing Practice for the Elderly, Long-Term Care Insurance System, Using Online On-campus Practice

1 はじめに

わが国において人口の高齢化が進行する中、高齢者の医療と福祉サービスを一体化した国際的にも斬新な社会システムである介護保険制度が2000年にスタートした。これに伴い、医療・看護・福祉分野の専門職が共通の認識やイメージを持ち、効率的に経験を共有化する評価方法の活用（岡本 1998）など、関係者全員の情報の共通利用が必要となった。さらに2005年の介護保険法改正により、地域包括支援センターが制定された。市町村がこれを設置し、地域の自主性や主体性に基づき、地域の特性に応じた地域包括ケアシステムを作り上げることとなった。以降、高齢者ケアの現場は大きく変化し、看護職が従来の医療世界の通念をこえた幅広い課題への取り組みを担うことが不可欠となった。高齢者の社会的入院の解消に伴う療養の場の多様化、自己決定に関する高齢者や家族の意識の変化、自宅で看取る経験のない家族の苦悩などを背景とし、社会から求められる看護師の役割や機能のニーズに変革が起きたと言えよう。介護保険制度はその後も改正を重ねながら日本社会に浸透し運用されている。しかし、後期高齢者の看取りのピークは2040年と見込まれており、2040年に予想されるニーズや社会環境、資源の変化を踏まえ、急増かつ変化していくニーズへの対応が求められている（三菱UFJリサーチ&コンサルティング 2017）。この時代を担うこととなる看護師をめざす学生に、何をどのように教授していくことが有用であろうか。今現在、高齢者看護学の教育方法のあり方も、重要な局面を迎えている。

2017年に新規開設された本学看護学部では、高齢者看護学の科目は2年次に開講され、基礎看護学に続き看護の基盤を学ぶ位置づけとなっている。前期必修科目の「高齢者看護学実習Ⅰ」では、臨地実習経験が少ない2年次に多岐にわたる施設で多様な高齢者と出会い、そのケア現場で多職種の実践を直に見ることから看護の役割を考えることをねらった。本科目のねらいを実習施設の臨地実習指導者に説明し、指導方法の打ち合わせを重ねて、初年度2018年度に開講、続いて2019年度の実習を行ってきた。

ところが開講3年目となる2019年末に起きた新型コロナウイルス（COVID-19）の蔓延に伴い、この実習の方法を大きく変更する必要に迫られた。文部

科学省高等教育局の通達（文部科学省高等教育局 2020）により、実習施設等の代替が困難である場合、実状を踏まえ実習に代えて演習又は学内実習等を実施することにより、必要な知識及び技能を修得することとして差し支えないことが示され、高齢者看護学実習Ⅰを急遽、臨地と大学とをオンライン接続し、学生が自宅等からアクセスして受講する学内実習（以下、オンライン学内実習）として実施することになった。

本学部の看護学実習は早期から「現場から学ぶこと」を重要視してきたが、方法と発想を大きく転換し、限られた期間に授業計画を立て実施に至った。その結果、従来の臨地実習とは大きく異なる方法で実習目的を達成する方法の可能性と課題、更に、今後の看護学実習を組み立てる際の示唆を見出すことができたので、ここに報告する。

2 高齢者看護学実習Ⅰの授業概要

高齢者看護学実習Ⅰは、2年次前期において2単位（90時間）配当される、基本実習段階の科目である。

2.1 実習目的および目標

(1) 実習目的

医療施設や介護保険施設に入院・入所する高齢者並びに地域で生活する高齢者など様々な健康レベルにある高齢者を広く理解する。地域で生活する高齢者の実態や高齢者が生活を営む医療施設や介護保険施設の特徴を知り、高齢者とその家族の価値観を尊重した対応を修得する。また、地域包括ケアシステムにおける高齢者支援の状況を知り、高齢者ケアに従事する保健医療福祉専門職間の連携と看護の機能について学ぶ。

(2) 実習目標

- ①様々な健康レベルにある高齢者とのコミュニケーションを通して、高齢者を個人、集団の視点からより深く理解する。
- ②様々な健康レベルにある高齢者の生活や療養の場で必要となる基本的な日常生活援助を実施できる。
- ③施設で療養生活をする高齢者とその家族の特徴を知り、科学的根拠に基づいた適切なケアの実際を理解する。
- ④地域で暮らす高齢者の特徴や生活を知り、生活に

おける強みや健康,生活上の問題を多面的に捉え,その人らしい生活に向けた支援を考案できる。

- ⑤地域包括支援センターでの実習を通して地域医療・ケアの情報活用と情報発信の実際を知り,地域で生活する高齢者とその家族へのサービスを理解する。

2.2 実習施設および実習内容

学生は実習期間中に(1)入院・入所施設, (2)通所施設, (3)地域包括支援センターの3か所の現場へ行く。そこで臨地の実習指導者のもと, ケアの見学や一部分の参加関与を経験する。

- (1) 入院・入所施設 (療養病棟, 介護老人福祉施設, 有料老人ホーム等)

療養病棟または介護老人福祉施設等に入院・入所中の高齢者にケアを提供する看護師に同行し, 既習の初歩的な看護援助を実施する。また, 高齢者1名に注目し, その人らしい生活の実現に向けた援助を考え, その一部を指導者とともに実践する。

- (2) 通所施設 (老人クラブ, デイサービス等)

老人クラブ活動やデイサービスを運営する施設において, 勤務する看護師または職員に同行し, 業務内容について見学しながら, 健康な高齢者または健康支援を必要とする高齢者を理解する。

- (3) 地域包括支援センター

地域包括支援センターにおける事業の内容や担当地区について, 担当者より説明をうける。センターにおける介護支援事業等に参加する。または, 地域包括支援センターの看護師, 保健師に同行し, 事業について見学しながら, 地域で生活し支援をうける高齢者の実態を理解する。

2.3 実習のまとめと評価

実習期間中に(1)入院・入所施設, (2)通所施設, (3)地域包括支援センターの3か所の現場で経験したことを統合し, 様々な健康レベルにある高齢者を個人, 集団の視点からより深く理解するため, 最終日の学内演習において最終レポートを作成する。

実習の評価は, 実習記録と最終レポートの内容, 及び, 臨地での態度等を合わせて総合的に評価する。これらは実習目標の達成度を基準として点数化する。

3 2018年度と2019年度の臨地実習

本科目は, 2018年度(平成30年度)に初めて開講し, 翌2019年度は同様の方法で開講した。それぞれの現場に学生が直接赴き, 臨地実習指導者と大学教員の指導を受けて実践的に高齢者看護の基礎を学ぶ, 従来の看護学実習方法で行った。

3.1 2018年度の臨地実習 (履修生114名, 全60施設での臨地実習)

- (1) 実習期間: 2018年7月2日(月)~13日(金)
※土日を除く10日間

- (2) 履修生: 看護学科2年次生 114名 (5名×18+6名×4 /22グループ編成)

- (3) 実習場所およびスケジュール: 学生は①入院または入所施設に4日, ②通所施設に3日, ③地域包括支援センターに1日, 大学内にてグループワークや記録のまとめ等を2日, のスケジュールで10日間の実習を行う。臨地実習指導者が目標に沿って効果的に学生指導できるよう, 一人の臨地実習指導者に対し, 原則的に学生6名までの配置とした。その上で, 実習期間の2週中に各学生が3か所の現場での実習を履修できるよう, 実習スケジュールをA日程とB日程の2つに分け, 同日に同じ施設で実習する学生数を調整した。

- (4) 実習施設

各施設で同日に受け入れ可能な学生数は, 施設の規模や指導体制によって異なる。各施設の実習指導担当者と打合せ, スケジュールされた期間中の指導で学生が実習目標を達成するために適した学生を配置した。その結果, ①入院または入所施設は各施設に5~12名で7施設, ②通所施設は2~6名で20施設, ③地域包括支援センターは1~4名で33施設, での臨地実習となった。

3.2 2019年度の臨地実習 (履修生76名, 全53施設での臨地実習)

- (1) 実習期間: 2019年7月1日(月)~12日(金)
※土日を除く10日間

- (2) 履修生: 看護学科2年次生 76名 (4名×4+5名×12 /16グループ編成)

- (3) 実習場所およびスケジュール: 2018年度と同じ (表1参照)

- (4) 実習施設

2019年度の臨地実習は, 履修生76名であった。学

表1 実習記録様式と課題

(1)入院または入所施設	臨地実習（2018・2019年度）の課題	オンライン学内実習（2020年度）の課題
実習記録1	実習目標（その日に達成する自己目標）、行動計画、実習方法・留意点、実施した結果、実習を振り返って（考えたこと・感想）を1日毎に記録する	「講話から学んだこと」自由記載 入所施設（4施設）
実習記録2・3	臨地で注目した高齢者の（日常生活）援助技術、なぜその援助をするのか、必要物品、実施する援助技術の具体的な方法、その方法を実施する理由・留意点、を記録する	動画事例A氏の（日常生活）援助技術を 考えて記録する
実習記録4	臨地で出会った高齢者一人に注目し、健康状態、身体機能の変化、生活行動（活動・休息・食事・排泄・身じたく・コミュニケーションの視点で全体像をまとめる）を記録する	動画事例A氏の健康状態、身体機能の 変化、生活行動を記録する
(2)通所施設		
実習記録1	事前学習：実習で訪問する高齢者施設（通所サービス）の概要、施設名、設置主体、事業目的・内容、を調べて記入する	無し（インタビュー計画書に含む）
実習記録2	実習施設で実施するレクリエーション企画（タイトル）、目的・対象者、場面設定・所用時間、グループメンバーと役割分担、実施方法（必要物品・レクリエーションの流れ・タイムスケジュール・会場配置等）、留意事項をグループで考え、通所サービス利用者への活動支援計画を作成する	新型コロナ禍において施設でのデイサービスに参加できない利用者を対象とする 企画を立案する（項目は左同）
実習記録3	実習目標（その日に達成する自己目標）、行動計画、実施したこと、気づいたこと・学んだこと、実習を振り返って（考えたこと・感想）を1日毎に記録する	「講話から学んだこと」自由記載 通所施設（3施設）
実習記録4	事後学習1：通所サービスを利用する高齢者の強みや健康、生活上の問題について考える 事後学習2：事後学習1をふまえて、その人らしい生活に向けた支援について考案する、2点について考え、3日間の実習を経た後に記録する	高齢者の活動性を高めるレクリエーション（グループ発表） レクリエーション発表会の評価、感想・今後の課題、高齢者への活動支援の方向性を記録する
(3)地域包括支援センター		
実習記録1	事前学習1：地域包括支援センターとについて事前学習したことを記入する 事前学習2：実習で訪問する地域包括支援センターの概要を調べて記入する	ホスト役割学生が事前学習会を開く（インタビュー計画書に含む）
実習記録2	実習で経験したこと、実習で出会った利用者から学んだこと、専門職者から学んだこと、を記録する	「講話から学んだこと」自由記載 地域包括ケア推進課（1施設）
実習記録3	事後学習1：地域包括支援センターとその地域の人々のつながりを示す模式図を考案する ※原則的に手書きで作成 事後学習2：地域包括ケアシステムにおける高齢者ケアの実際について情報活用と情報発信の視点から説明する	地域包括ケアシステムにおける高齢者ケアを示す模式図を考案する 【考案のポイント】 ・地域包括ケアシステムにおける情報活用と情報発信 ・地域包括支援センターとその地域の人々のつながり ※PowerPoint、他のツール、手書き等、作成方法は自由

生の配置は、入院または入所施設は各施設に8～10名で5施設、通所施設は2～6名で20施設、地域包括支援センターは1～3名で28施設、での臨地実習

となった。

3.3 臨地実習の進め方

各施設の臨地実習で、限られた期間に有意義な実

習内容を経験できるよう、臨地実習指導者と話し合いを重ね、以下の進め方を基本とした。

(1) 入院・入所施設実習の進め方

- ①高齢者にケアを提供する看護師または介護スタッフ等に同行し、既習の初歩的な看護援助を実施する。
 - ・高齢者の生活スタイルに合わせ、高齢者と時間を共有する
 - ・看護師が医療ケアを高齢者に提供する場面があれば、見学する
 - ・介護スタッフから高齢者にケアを提供する場面があれば、補助的または一部主体的に関わる

- ②高齢者1名に注目し、その人らしい生活の実現に向けた援助を考え、その一部を指導者とともに実践する。

- ・療養生活する高齢者に適した日常生活援助の一部について、根拠に基づいた計画を立てる
- ・療養生活する高齢者に適した日常生活援助の一部を、自立支援と安全に留意して実施する

(2) 通所施設実習の進め方

- ①事業所で実施している高齢者を対象とした通所サービスの概要や参加方法の説明を受ける。

- ・利用者、スタッフ、設備、その他（季節のイベント事業など）のあらまし
- ・活動に参加する時に、注意すること

- ②高齢者を対象とした通所サービスの活動に参加する。

- ・通常の活動内容に合わせ、高齢者と時間を共有する
- ・介護スタッフから高齢者にケアを提供する場面があれば、補助的または一部主体的に関わる
- ・看護師が医療ケアを高齢者に提供する場面があれば、見学する

- ③通所サービス活動の一部分において学生企画を実施し、主体的に参加する。

- ・実習指導者から助言を受け、学生のレクリエーション企画案を作成する
- ・高齢者の自立支援と安全に留意し、企画した活動を実施する

(3) 地域包括支援センター実習の進め方

- ①事業所で実施している支援の概要について、説明を受ける。

- ・利用者、スタッフ、その他（イベント事業など）のあらまし

- ・担当地域内で連携をしている団体（例：病院、警察、消防など）と連携方法

- ・実習で支援活動に参加する場合に注意すること

- ②高齢者を対象とした事業等に参加する。

- ・通常の活動内容に合わせ、高齢者やその家族と時間を共有する
- ・保健師や看護師が高齢者やその家族に支援をする場面があれば、見学する
- ・スタッフが高齢者やその家族に支援をする場面があれば、見学または一部補助的に関わる

3.4 臨地実習の実習記録

学生は、入院または入所施設、通所施設、地域包括支援センターそれぞれの実習経験からの学びを記録し、学内でのまとめで統合し、高齢者看護の基盤となる考え方を修得する。2018年度と2019年度の実習記録様式は、実習目的と目標を達成するための指針となるように項目を検討し、同一様式を使用した。2020年度の学内実習の実習記録と合わせ、それぞれの実習記録様式の概要を表1に示す。

3.5 臨地実習のまとめと評価

10日目の学内演習において、以下の方法での最終レポート作成を課した。

テーマ：様々な健康レベルにある高齢者への適切な支援について実習経験をもとに考察する

- (1) 実習経験の中で特にどんなことに焦点をあてて考察するかを決め、そのテーマを基に具体的なタイトルをつける
- (2) そこに焦点をあてて書きたい、と考えた理由
- (3) 考察に関連する実習での経験は何か
- (4) 上記の実習経験をとおして分かった事や自分の考えが変わった事は何か、その理由
- (5) 今後、看護学を修得していく中で活かしたいこと

評価は、実習記録と最終レポートの内容、及び、臨地での態度等を合わせた総合的評価とした。実習記録と最終レポートは、実習目標の達成度を基準として点数化した。

4 2020年度のオンライン学内実習

(履修生67名、全8施設の協力)

本実習3回目の2020年度は、新型コロナウイルス感染症の蔓延による「緊急事態宣言」解除後の6月29日～7月10日の期間に、オンライン授業形式によ

る学内実習を実施した。新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐため、対面での会話による飛沫の拡散や、人と人との直接的・間接的な接触を最小限にしながら、2018年度と2019年度に実施した従来の臨地実習と同じ目的や目標を達成することをめざした。

そのために、施設の臨地実習指導者が「講話と質疑応答」という形式でオンラインでの学生指導を行い、従来の学びをオンラインで経験できるように工夫をした。その際、重視した方針は以下のとおりである。

- (1) 実習目的と目標、実習スケジュールはできる限り変更しない。
- (2) 学生が個人やグループの役割を自覚し、主体的に参加する仕掛けをつくる。
- (3) 臨地実習に近い形をとるため、実習施設側の意見を取り入れ、施設側の協力による工夫を活かし

た実習内容とする。

- (4) 学生が直接的に臨地実習指導者の指導を受けられるよう、実習期間中の大学教員の仲介は最小限とする。
- (5) 実習目標と実習方法に合致した評価方法を検討し学生に提示して、学生が実習終了時、速やかに自己評価できるようにする。

4.1 オンライン学内実習の方法

- (1) 実習期間：2020年6月29日（月）～7月10日（金）
※土日を除く10日間
- (2) 実習時間：9：15～16：20
- (3) 実習場所およびスケジュール：学生は①入院・入所施設は1日目～5日目、②通所施設は7日目～10日目の午前、③地域包括支援センターは6日目、全体のまとめは10日目午前、のスケジュールで10日間のオンライン学内実習を行った（表2）。

表2 オンライン学内実習スケジュール

2020年度：1～12グループ 履修生67名	
1～6G 34名	7～12G 33名
1日目	一斉オンライン演習 ※ケア現場の動画視聴を含む
2日目	入所施設実習 グループワーク（オンライン） 事例に基づく援助計画作成 各施設の専門職へのインタビュー案作成、司会進行方法の計画立案
3日目	A病院 ※A病院 ゲスト聴講 オンライン講話と質疑応答 特別養護老人ホームC (ホスト1～3G：ゲスト4～6G) オンライン講話と質疑応答 ※特養C ゲスト聴講 (ホスト7～9G：ゲスト10～12G) ※B病院 ゲスト聴講
4日目	B病院 オンライン講話と質疑応答 (ホスト10～12G：ゲスト7～9G) 事例の援助計画作成
5日目	介護付有料老人ホームD ※有料ホームD ゲスト聴講 オンライン講話と質疑応答 (ホスト4～6G：ゲスト1～3G) 入所施設 事例の援助計画まとめ
6日目	地域包括支援センター実習（一斉オンライン演習） A市地域包括ケア推進課 講話と質疑応答
7日目	通所施設実習 グループワーク（オンライン） レクリエーション企画作成 各施設の専門職へのインタビュー案作成、司会進行方法の計画立案
8日目	デイサービスA ※デイサービスA ゲスト聴講 午前 オンライン講話と質疑応答 A市社会福祉協議会 (ホスト4～6G：ゲスト1～3G) オンライン講話と質疑応答 ※A市社会福祉協議会 ゲスト聴講 (ホスト10～12G：ゲスト7～9G) ※デイサービスB ゲスト聴講
9日目	デイサービスB オンライン講話と質疑応答 (ホスト7～9G：ゲスト10～12G) レクリエーション企画発表会準備（グループワーク）
10日目	レクリエーション企画発表会 レクリエーション企画発表会 全体のまとめ

(4) 実習施設

2020年度の学内実習は、履修生67名であり、学生5～6名の12グループを編成し、学生が個人やグループの役割を自覚し主体的に参加する、とした。なお、オンライン学内実習全般において「東京情報大学ネットワーク利用要綱」を遵守することを周知した。

(5) オンライン環境

オンライン学内実習のツールとして、学生、教員共に、パソコン、タブレット、スマートフォンを使い、アプリケーションは、ZoomとTeamsを使用した。

学生は大学構内に入らず、それぞれの居場所からオンラインで実習に参加した。教員は、大学構内の各自研究室でアプリケーションを操作し、全体での講話等にはZoomミーティングを、少人数のグループワークや個々の学生とのやり取りは、Teamsのビデオ・通話やチャット機能を使った。

4.2 オンライン学内実習の内容

実習1日目に初めて行うグループワークの課題は「Myグループ実習計画－臨床の醍醐味をオンラインで！新しい実習スタイルへの挑戦－」の作成、とした。この課題は、グループ目標設定、実習期間中にグループワークを行う日時や役割等の計画を立てるものである。この課題に初めに取り組むことで、学生がグループの構成員としての自覚を持ち、主体的に参加する動機づけとなることをねらった。

従来の臨地実習と同様の学習成果が得られる「オンライン学内実習」を実施することをめざして、2020年度の臨地実習を依頼していた施設に、新たな授業計画案を説明した。学生が今日の高齢者ケアを知るために、特徴的な施設8か所（表3）を選び、オンライン講話のねらいを説明し、お話を聞きたい内

表3 2020年度オンライン講話施設
(履修生67名 全8施設)

(1)入院・入所施設：4施設	
病院	2
特別養護老人ホーム	1
介護付有料老人ホーム	1
(2)通所施設：3施設	
デイサービスセンター	2
老人福祉センター	1
(3)地域包括支援センター：1施設	
A市	1

容を複数の選択肢として示した。また、実習目的に対応したオンライン講話のねらいとポイントを文章化し、臨地実習と同等な学習効果を得るための協力を各施設に依頼した。教員と臨地実習指導者との打ち合わせは、電話やメール、最小限の回数で教員が直接施設に伺う等の方法で、複数回行った。

(1) オンライン講話のねらい

実習目的から以下4点を抽出し、学生がホスト役割を担って講話と質疑応答の司会進行を行い、双方向のやり取りを通して高齢者ケア現場の理解を深めること、をねらいとした。

- ①地域で生活する高齢者の実態や高齢者が生活を営む医療施設や介護保険施設の特徴を理解する。
- ②高齢者とその家族の価値観を尊重した対応を修得する。
- ③地域包括ケアシステムにおける高齢者支援状況を知る。
- ④高齢者ケアに従事する保健医療福祉専門職間の連携と看護の機能を知る。

(2) オンライン講話のポイント

①実習目的に沿った講話の例

実習目的に沿った講話の例を、実習施設（入所施設、通所施設、地域包括支援センター）の形態毎に、実習目的に沿って文章化した。（表4-1、表4-2、表4-3）

②質疑応答の方法

学生は5～6名のグループ毎、更に3つのグループが各々の案を持って話し合い、各グループが担当する施設の講話と質疑応答のホスト役割を担う準備すること、とした。ホスト役割グループの学生は、臨地実習指導者への質問項目や、誰がどんな順序で聞くか等の進行方法を考え、インタビュー計画書（図1）を作成した。また、講話の前日までに、ホスト役割以外の学生（以降、ゲスト聴講）への説明と参加依頼を、ホスト役割学生が行った。

4.3 オンライン学内実習の進め方と実習課題

オンライン講話と質疑応答から学んだことを活用して課題に取り組むことができるよう、従来の実習記録様式を基にした新たな実習記録様式を作成した（表1に併記）。学生が講話から学んだ事を直ぐに課題への取り組みに活かし、「オンラインでの実習経験」から得た知見を課題の解決に活用することで臨

表4-1 実習目的に沿った入所・入所施設講話の例

(1)入院・入所施設：病院2施設 特別養護老人ホーム1施設 有料老人ホーム1施設
1. 高齢者が生活を営む医療施設や介護保険施設等の特徴を理解する ・施設の位置する地域の特徴や施設内の設備等, 写真や広報誌の画面共有で示す ・法令上の各施設の機能や役割
2. 高齢者とその家族の価値観を尊重した対応を修得する ・高齢者の日頃の生活や療養の様子と, その家族の様子 ・高齢者や家族に対応する際に, 職員が気を付けていること, 工夫していること等
3. 地域包括ケアシステムにおける高齢者支援状況を知る ・地域に開かれたイベント等事業の具体例 ・地域の他施設, 事業所や, 行政との連携の具体例
4. 高齢者ケアに従事する保健医療福祉専門職間の連携と看護の機能を知る ・各施設の看護師が普段している業務 (主に日常生活援助の実際) ・看護師が高齢者にケアを提供する際に気を付けていること等の具体例 ・社会福祉士・介護福祉士・医師・看護師・相談員・理学(作業)療法士・栄養士・薬剤師等の専門職が日頃どのように情報の共有をしているかの具体例, 等

表4-2 実習目的に沿った通所施設講話の例

(2)通所施設：デイケア・デイサービス事業所2施設 老人福祉センター1施設
1. 地域で生活する高齢者の実態や, デイケア・デイサービス事業所, 老人福祉センターの特徴を理解する. ・施設の位置する地域の特徴や施設内の設備等, 写真や広報誌の画面共有で示す ・法令上の各施設の機能や役割
2. 高齢者とその家族の価値観を尊重した対応を修得する. ・高齢者の日頃の活動状況と, その家族の様子 ・施設を利用する高齢者に対応する際に, 職員が気を付けていること, 工夫していること等
3. 地域包括ケアシステムにおける高齢者支援状況を知る. ・地域に開かれたイベント (例:健康フェスティバル, 夏祭りなど季節イベント) の紹介 ・地域の他施設, 事業所や, 行政との連携の具体例
4. 高齢者ケアに従事する保健医療福祉専門職間の連携と看護の機能を知る. ・各施設の看護師が普段している業務 (医療的ケアや日常生活援助の実際) ・看護師が高齢者にケアを提供する際に気を付けていること等の具体例 ・社会福祉士・介護福祉士・看護師・相談員・理学(作業)療法士・事務部門等の職員が, 日頃どのように情報共有をしているかの具体例, 等

表4-3 実習目的に沿った地域包括支援センター講話の例

(3)地域包括支援センター：A市
1. A市の地域包括ケアシステムの実際を知り, 地域で生活する高齢者とその家族へのサービスを理解する. ・地域包括ケアシステムにおけるA市の高齢者支援の状況について ・A市における地域包括支援センターの機能と役割 ・A市や各事業所で実施している支援の具体例 ・日頃の利用者(高齢者やその家族)の様子 ・担当地域内で連携をしている団体(例:病院, 警察, 消防など)と連携方法等
2. 高齢者ケアに従事する保健医療福祉専門職間の連携と看護の機能を知る. ・各事業所の保健師や看護師が普段している業務 ・高齢者を支援する際に気を付けていること, 工夫していること等 ・保健師や看護師が高齢者やその家族に支援する場面の具体例 ・保健師・看護師・社会福祉士・相談員等の職員が, 日頃どのように情報共有をしているかの具体例

インタビュー計画書	
施設名：	
実施日程：令和2年 月 日（ ）	
1. ホスト役割学生集合	時 分（担当教員を含む： ）
2. 指導者との事前打合せ	時 分～
3. 参加者全員の入室	時 分～
（全員参加の講話と質疑応答の後にホスト役割学生と指導者との時間をとってよい）	
4. 終了予定	時 分 ※2～4を90分以内とする
連絡事項（特にホスト役割以外の学生に協力して欲しい事など）	
学生の役割	
司会：	タイムキーパー：
書記：	その他：
タイムスケジュール・進行方法の概要	質問する内容とその理由・司会進行上の留意点

図1 インタビュー計画書

地での経験と同様な学習効果が得られるように工夫した。

(1) 入院・入所施設の実習課題

学生は学内実習1日目に介護保険施設に入所している高齢者A氏の動画を視聴する。動画で視聴したケア現場での情報と教員が作成して提示した補足情報資料「6/29実習指導Nsからの受け持ち患者情報」を基に、動画事例の高齢者A氏について、その人らしい生活の実現に向けた援助を考え、根拠に基づいた具体的な援助計画作成をすること、とした。また、現場で実施する際、どんな点に留意すると「自立支援」と「安全」が確保できるかを具体的に考え、事例に適した工夫をすること、とした。動画視聴と補足情報のアセスメントを講話からの情報と関連付けて統合し、A氏の全体像と援助計画に活用する過程を、図2 動画事例A氏の援助計画作成方法に示す。

(2) 通所施設の実習課題

学内実習7日目午前にレクリエーション企画の立案方法（図3-1）について学生に説明し、企画書の例を示した。通所施設の講話から学んだことを「オ

ンラインでの実習経験」として捉え、レクリエーション企画立案とオンラインでのグループ発表（10日目午前）に活用すること、とした。グループ発表は「新型コロナ禍において施設でのデイサービスに参加できない利用者を対象とした実演」とし、学生67名を2分割して行った（図3-2）。自己のグループ発表と、高齢者の立場で参加した他グループ5つのレクリエーションの「よかったところ」「改善点」等を考えて評価し記録する様式を作成した。

(3) 地域包括支援センターの実習課題

6日目午前にホスト役割学生が主催する事前学習会をした。ホスト役割グループが地域包括支援センターについて、また、講話を聴くA市の地域包括ケアシステムについて調べたことをスライドにまとめて発表した。その後、学生が司会進行をして、講師への質問や、誰がどんな順序で聞くか等の進行方法を、学生全員で考えて計画を立てた。

午前の事前学習会と午後の講話や質疑応答から学んだことは、「地域包括ケアシステムにおける高齢者ケアを示す模式図」を考案する際に活用すること、とした。

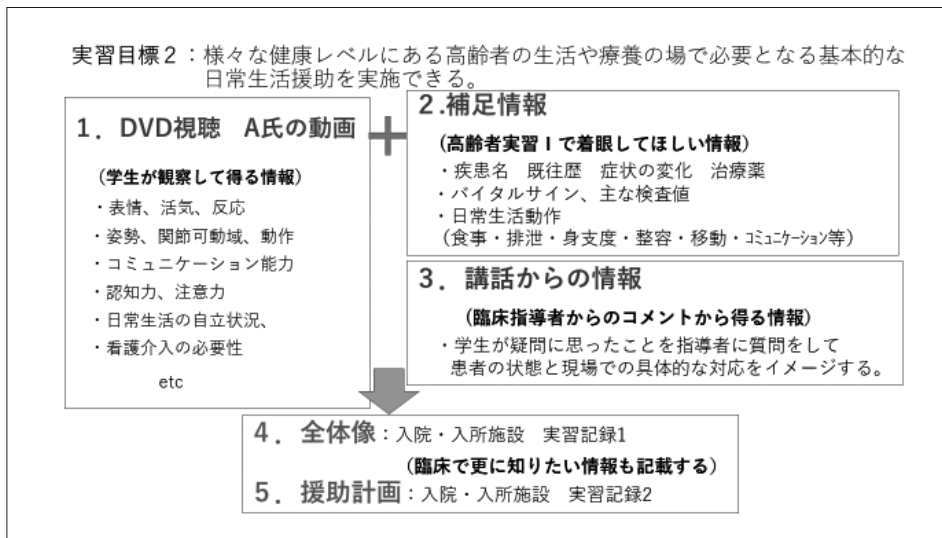


図2 動画事例A氏の援助計画作成方法

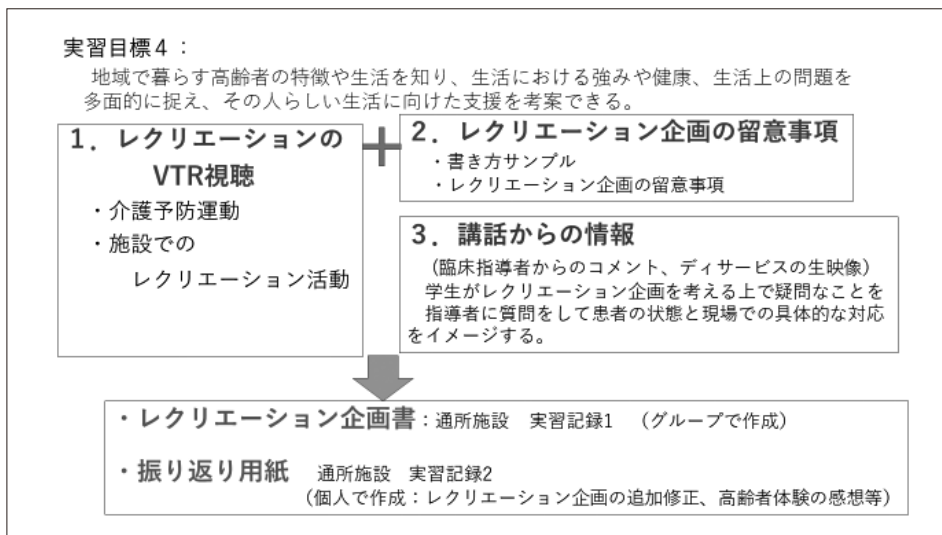


図3-1 レクリエーション企画の立案方法

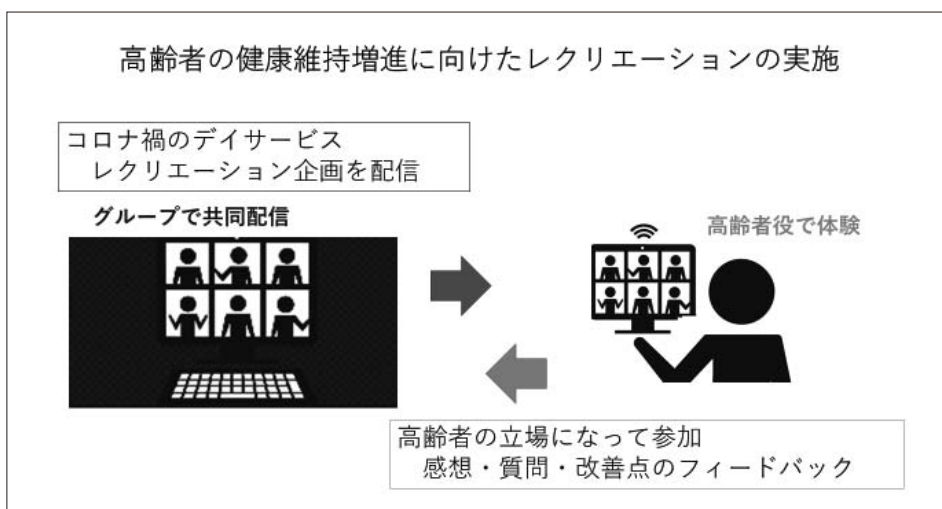


図3-2 レクリエーション企画の発表方法

4.4 学内実習のまとめと評価

10日目午後、オンラインで全学生対象に最終レポート作成方法（臨地実習のまとめと同様）の説明をした。また、初回のグループワーク「Myグループ実習計画－臨床の醍醐味をオンラインで！新しい実習スタイルへの挑戦－」に記載したグループ目標を再掲し、その目標に対する振り返る自由記載を課

した。

学内実習の評価は、実習記録と最終レポートの内容、及び、講話の質疑応答やグループワークの態度等を合わせた総合的評価とした。実習記録と最終レポートは、実習目標の達成度を基準として点数化した（表5）。

表5 2020高齢者看護学実習Ⅰ 評価表

	評価の視点	配点
	様々な健康レベルにある高齢者とのコミュニケーションを通して、高齢者を個人、集団の視点からより深く理解する。（最終レポート）	
1 10点	① 様々な健康レベルにある高齢者とのコミュニケーションで重要な事項を具体的に挙げるができる	5
	② 様々な健康レベルにある高齢者の生活を個人および集団の視点から考察し、適切な支援の在り方を説明できる	5
	動画事例にある高齢者の療養の場で必要となる基本的な日常生活援助を実施可能な具体性をもって立案できる	
2 30点	① 動画事例A氏の健康状態を身体機能の変化から説明できる	5
	② 動画事例A氏の健康状態を生活行動の視点から説明できる	5
	③ その援助を選んだ根拠と実施する看護技術の具体的な方法を説明できる	(5点×2) 10
	④ その方法で実施する理由と留意点を説明できる	(5点×2) 10
	施設で療養生活をする高齢者とその家族の特徴を知り、科学的根拠に基づいた適切なケアの実際を理解する。（オンライン講話 実習記録1-①）	
3 10点	① 施設で療養生活をする高齢者とその家族の特徴を知るための質問内容を考え、主体的かつ適切な方法で質疑応答に参加して理解することができる	5
	② 施設で療養生活をする高齢者とその家族に提供されるケアの科学的根拠を理解するための質問内容を考え、主体的かつ適切な方法で質疑応答に参加して理解することができる	5
	地域で暮らす高齢者の特徴や生活を知り、生活における強みや健康、生活上の問題を多面的に捉え、その人らしい生活に向けた支援を考案できる。	
4 30点	① 地域で暮らす高齢者の特徴や生活を知るための質問内容を考え、主体的かつ適切な方法で質疑応答に参加して理解することができる（オンライン講話 実習記録1-①）	5
	② 地域で暮らす高齢者の生活における強みや健康、生活上の問題を多面的に捉えるための質問内容を考え、主体的かつ適切な方法で質疑応答に参加して理解することができる（オンライン講話 実習記録1-①）	5
	③ 地域で暮らす高齢者のその人らしい生活に向けた支援（レクリエーション企画）を考案できる	5
	④ 通所サービスを利用する高齢者のレクリエーションを企画する際に対象者とのコミュニケーションで重要となる事項を具体的に挙げることできる	5
	⑤ 考案したレクリエーション企画を対象者に適した方法で説明できる	5
	⑥ 考案したレクリエーション企画を対象者に適した方法で実演しその効果を振り返って評価できる	5
	地域包括支援センターでの実習を通して地域医療・ケアの情報活用と情報発信の実際を知り、地域で生活する高齢者とその家族へのサービスを理解する。（オンライン講話 実習記録1-③）	
5 10点	① 地域包括ケアシステムにおける高齢者ケアを情報活用と情報発信の視点から図で示すことができる	5
	② 地域包括支援センターとその地域の人々のつながりを図で示すことができる	5
総合 10点	① 主体性 ・個人やグループの役割を自覚し主体的に参加することできたか	5
	② 態度 ・情報倫理に違反する行為はなかったか	5
	③ 態度 ・適切な言葉遣いや態度で双方向のやり取りに臨むことができたか	5

※自己評価点数のめやす 5点：よくできた 3点：できた 1点：不十分だ

評価点数計 100

5 看護学における臨地実習の課題とオンライン学内実習の成果

5.1 看護学における臨地実習の課題

「高齢者看護学実習Ⅰ」では、臨地実習経験が少ない2年次に多岐にわたる施設で多様な高齢者と直に出会い、ケア現場で多職種が行うケアの実践に参加して、看護の役割を考えることをねらってきた。高齢者との関わりの経験に乏しい学生が多い中、高齢者ケアを担うことが見込まれる看護職をめざす学生が高齢者と直接的にコミュニケーションをとる経験は必須である。また、学生はこの実習で現場の介護職からの指導を受けながら高齢者の日常生活援助を体験し、高齢者の生活を支援する介護職の専門性に気づいてきた。地域包括ケアシステムの構築において重要な課題の一つが医療と介護の連携である。医療と介護の適切な連携を図ることが要介護状態等になることの予防や要介護状態等の維持改善に結びつき、結果として再入院率の改善に結び付くと考えられる(小野 2020)。学生は高齢者福祉施設とそこに従事する福祉専門職の活動の一部を体験し、社会福祉に興味関心を持つ貴重な機会を得てきた。学生自身が高齢者ケアの現場を直接見て参画することで、教室で教員から学ぶ場合とは異なり、実感をもって他職種の専門性を理解することができる。この体験から得られる学びは臨地実習ならではの醍醐味から生まれるものであり、オンライン学内実習で得ることはできないものであろう。

高齢者ケア施設では、インフルエンザやノロウイルス等による集団感染を起こさないための感染予防対策に力を注いできた。すでに蓄積された経験や知見を基盤とし、新型コロナウイルスに対応する感染予防対策を確立しつつある。今後、看護学生の臨地実習を継続するにあたり、学内の講義や演習科目において感染症に関する知見を十分に修得させることが必須である。本実習に先行して履修する高齢者看護学概論に高齢者の生活の場における感染症対策の講義を充実させ、十分な感染予防対策をとった上で現場での臨地実習を安全に実施することが課題となる。

5.2 オンライン学内実習の成果

従来の臨地実習を実施するにあたり、全施設に教員が伺い、本科目のねらいやそれに至るための指導方法の打ち合わせを重ね、初年度2018年度、続いて

2019年度の実習を行ってきた。学生が限られた期間の中で実務に奔走している現場の実習指導者から目的に合う指導を受ける機会を確保できるよう、教員が学習環境を整える必要がある。しかし、教員自身が福祉施設での実務経験をほとんどもっていなかった。この実習の準備過程の中で、それぞれの施設内を見せて頂き、実際の活動を知る機会を得ることになり、実習に先行する授業内容にもそれを活かしてきた。

2020年度にオンライン形式の学内実習を短期間で計画する際、2017年度の実習準備および、2018年度と2019年度の実習展開の経験が大いに役立った。教員がそれぞれの施設形態がもつ特性を知るために適した施設を選定し、オンラインでの講話を依頼した。その結果、依頼した施設全てからの協力を得ることができた。実習当日は各施設の実習指導者が工夫を凝らし、実習経験が少ない学生の理解を促す資料を提示しながらの講話と学生との質疑応答で学生指導をした。また、学生は講話を聴くだけでなく、グループ毎に分担してホスト役割を担い、学生自らが限られた時間内に目的をもって質疑応答の進行を行った。その際、全学生から自発的な発言や質問があり、知りたいことを自主的に発言して実習指導者から助言を得ていた。この工夫により、実際の臨地実習で必要となる、主体的な実習への参加を促すことができたと考える。

従来の臨地実習では、3か所の実習施設に指定時間につくことにエネルギーを使い果たし、その場にいることで精一杯となる学生があった。この場合、学生は臨地で実習目標を意識して学ぶ姿勢をとることができない。しかし、オンライン学内実習では自宅等の落ち着いた環境で受講することができる。特に1日のみの日程である地域包括支援センター実習では、この利点が影響し、講話と質疑応答からの学びが実習記録に具体的に活用されていた。

このように成果が見られた点を集約し、以下の4点にまとめた。

- (1) 2018年度、2019年度の臨地実習を通して得た各施設とのつながりを活かし、臨地実習指導者と教員が実習のねらいを共有し連携することができた。
- (2) 学生が主体となるホスト役割の設定によってグループワークが活性化し、個々の学生の動機付けにつながった。

- (3) 学生がグループで計画を立てて臨み、A氏の援助計画立案やレクリエーション企画の発表という課題に講話から得た知見をすぐに活用することで一連のオンライン実習経験が統合され、実習目的の達成につながっていくことが期待できる。今後は、学生の最終レポートを分析していく。
- (4) 学生は従来と同じ実習期間内に、より多くの臨地実習指導者の講話に参加し、複数の施設を知ることができた(図4)。臨地への移動に費やされてきた学生の負担が軽減し、実習の学びにその力を活かすことができた。

6 これからの高齢者看護学実習に向けて

これまで看護教育が重要視してきた臨地実習方法は、実学としての看護学の基盤となっていた。人の健康を対象とし、何が起きるかその日その時にしか分からない状況の中で、専門職がどのようなケアをしているのか、この現場のダイナミクスをオンラインで学ぶことは難しい。現場で起きる出来事への対応を知ることにより、学生は専門職の判断力や柔軟性を学んできた。これからの高齢者看護学実習においても、高齢者とのコミュニケーションを学生自ら経験する、ケアを提供する専門職者の実際の動きを現場で見る、という方法を継承していくことが必要であろう。

今日まで教員は、多岐にわたる高齢者ケアの現場

を学生に広く理解させる為の努力を積み重ねてきた。そして、限られた教員数で実習を組み立てる準備等に多くの困難も経験してきた。例えば、施設への移動に費やされる時間的な限界、打合せの移動に伴う事故の危険性、多くの業務をもつ臨地実習指導者と時間を調整する難しさ、などである。学生にとっても慣れない地域や遠方の施設に赴く移動中の事故や交通利便性の問題等があった。

2020年度のオンライン学内実習を経験し、実習目的に適用新しい方法としての成果を得て、この実習方法の可能性を知ることとなった。学生が多岐にわたる高齢者ケアの現場を限られた実習期間内に理解するのは難しい。しかし、学生の主体性を引き出す仕掛けをつくり、多様な高齢者や関係する人々の現状と支援する専門職の活動を講話に取り入れ、臨地実習指導者と学生との双方向のやり取りが実現できれば、オンライン学内実習で現場の今を理解することが可能となる。従来の臨地実習とオンライン学内実習の利点を組み合わせ、これからの高齢者看護学実習の方法をさらに検討していきたい。

【文 献】

三菱UFJリサーチ&コンサルティング, 2017, 『地域包括ケア研究会報告書: 2040年に向けた挑戦: 地域包括ケアシステム構築に向けた制度及びサービスのあり方に関する研究事業報告書』平成28年度老人保健事業推進費等補助金老人保健健康増進等事業。

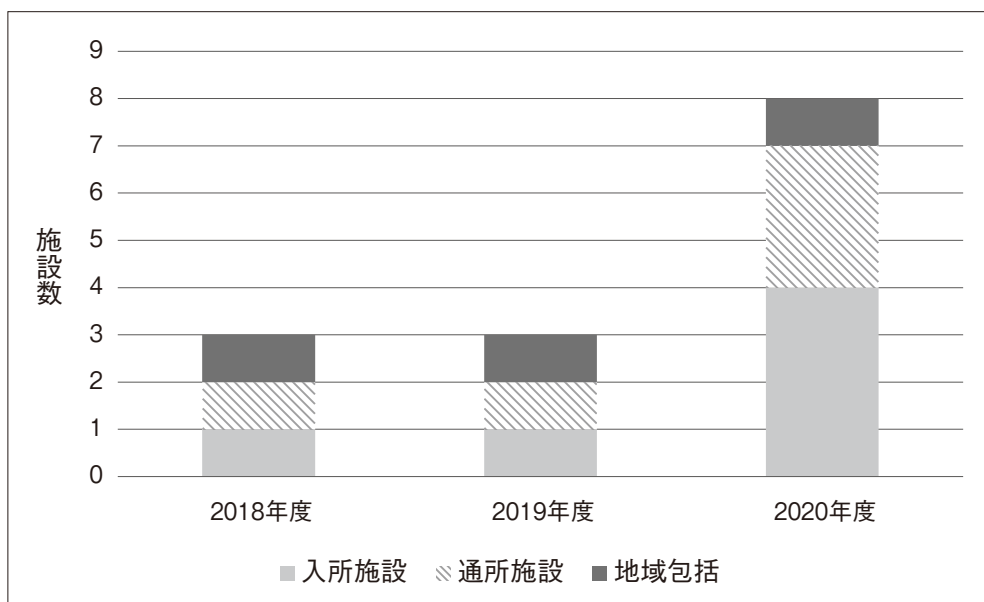


図4 学生一人が経験した施設数

文部科学省高等教育局, 2020, 『新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校, 養成所及び養成施設等の対応について』事務連絡(令和2年2月28日).

岡本祐三・並河正晃・藤本直規・森山美智子, 1998, 『高齢者医療福祉の新しい方法』医学書院.

杉崎千洋・小野達也・金子勉, 2020, 『単身高齢者の見守りと医療をつなぐ地域包括ケア—先進事例からみる支援とネットワーク』中央法規.